

Zun 寸 dō 洞

THE GIFU UNIVERSITY LIBRARY BULLETIN

第38号 2005 . 11

図書館ホームページ URL : <http://www.gifu-u.ac.jp/~gulib/>

目 次

館蔵資料紹介 No 28	2006年外国雑誌購入変更リスト	5
東アジアの中の日本 加藤 正吾	新規電子的資料紹介	6
展示会報告	平成16年度図書館統計	6
論文検索と論文入手の概要		

館蔵資料紹介 No 28

東アジアの中の日本

加 藤 正 吾



私が本を読むようになったのは、実は大学に入ってからである。それまでに読んだ本と言えば、ほとんどが読書感想文の課題図書などの類であった。読書感想文が苦手だったこともあり、本を読もうという自発的な気持ちはまったくなかった。しかし、人生には契機というものがある。高校の国語の授業の際に、教科書には一部しか載っていない夏目漱石の『こころ』を先生に全文読むように指示された。これが本のおもしろさを知るきっかけとなって、大学入学後の通学時間の長さから、読みながら寝てしまうこともあった(というより、眠るきっかけのために読んでいた)が、電車の時間が有意義な読書の時間であった。よく岩波文庫を読んでいたので、サークルの同級生には、「大丈夫か?」と言われる始末であった。私が大学に入学した当時は岐阜大学生協にも岩波文庫が並んでいたが、今はその面影もない。館蔵資料紹介では、大型コレクションを取り上げて紹介するのが通例であるようだが、私は、読書経験から得た稚拙な疑問や考え方を披露しながら、「東アジアの中の日本」を考えるための書籍を少しばかり紹介したい。

人間が物事を扱う上で、名称を付けたら、グループ化することの重要性と問題点を感じることができる著書がある。宮脇昭編著の『日本植生誌』である。植生とは、

ある場所が植物によって被覆されていることを指し、それを構成する代表的な種などを捉えて呼び名を与えたものである。例えば、「植生はブナ林である」とか「植生は草原である」といったような使い方をする。名称を与え、区分することで人間に森林の植生が扱えるようになる。この植生区分を全国の森林地帯に行い、北海道・東北・関東・中部・近畿・中国、四国・九州・屋久島・沖縄/小笠原という全10冊にまとめあげたことは植物社会学の歴史にとって特筆すべきことである。私は学部生時代に屋久島でのヤクザル調査に参加した。その調査は、特産のボンカンなどがヤクザルによって猿害にあっていたため、まずはヤクザルの群れの大きさや数を把握することが、主な目的であった。調査から大学へ帰ってきて、ふと図書館で目に留まったものがあつた。それがこの植生図であった。この本は参考図書として所蔵されているため、借りていくことができない(ここで取り上げている植生図は1枚だが、この植生図の説明を加えている本全体は非常に分厚く重いため、実際にはとても持ち出す気にはならなかった)。自然いっぱい森の中で、双眼鏡を使いヤクザルを追いかけた場所とその植生との関係を読み解くために、図書館の中で色刷り紙を見るのは非常に楽しかったことを記憶している。

この中で宮脇は、植生帯を二元論的に、常緑樹林帯（例えば、シイ・カシ林）と落葉樹林帯（例えば、ブナ林）は境界を接するものとした。森林は道路と畑というように明確の境界を持つものではないが、この境界が接するはずという主張によって、岐阜県の植生帯は、下呂市南部まで大きな区分では常緑樹林帯となってしまうこととなった。また、環境省はこの考え方にしがっているため、自然環境基礎調査も同様の手法で行われている。私は岐阜県の森林を見る限り、このパラダイム（パラダイム：ある時代に支配的な物の見方、考え方、認識の根本的な枠組み）には賛同できない。この大著からは、自然の多様さ・複雑さを捉えることの難しさに触れることができる。科学もまた人の作り出したものであり、政策として採用されるとその科学的批判は政治的批判になってしまうこともあるだろう。科学は、「現時点で、その現象を説明しているもの」でしかない。

このような日本の植生を扱う上で地理的な歴史を無視することはできない。日本の植生が現在のようになったのは、東アジアの縁であることや、氷河期以後、大陸とは海で遮断されていることなどが影響している。今の私にはまだ大陸を見通すどころか、岐阜県内で精一杯であるが、私はこの先人の著書のおかげで、どのように植生を扱うべきかと疑問が生まれ、その疑問への答えを求めて研究を行っている。

東アジアを作り出している大陸、そして地球全体に目を少し向けてみると、人類史を地球全体で捉えなおした本がある。『銃・病原菌・鉄（上・下）一万三〇〇〇年にわたる人類史の謎』ジャレド・ダイヤモンド著である。この本は人類の歴史の偶然と必然について書かれている。人類史を西洋に限定することなく、地球全体で文明の起源から捉えたすばらしい本である。農学系科目ではレポート課題の指定図書とされることも多いが、他の学部の学生にも是非読んでもらいたい一冊である。この書には、世界の人類史を決定付けたのは、農耕が人口を爆発させ、家畜生産が病原菌の蔓延と抵抗性を生み、余剰産物や人口爆発が人間の社会構造を作り出し、さらにはユーラシア大陸が東西に長いことが、農耕の普及を容易にし、その大陸にたまたま栽培可能な植物、家畜化可能な哺乳類の多かったことが、他の大陸に比べて有利に働いたこと、そしてこれらの要因が小さかった他の大陸の人類と、ユーラシア大陸の人類が出会った時に、病原菌の抵抗性によってその結果はおのずと決まっていたことが、人類史を決定づける要因として説明されている（推理小説のように面白いので各自読んでもらいたい）。つまり、今の人類の競争関係を決定づけたのは、だれ（どの人種）がそこにいたかではない。どこ（どの大陸、環境）にいたかということだけである。そして日本はその豊かな生物資源を利用可能なユーラシア大陸の東端にある。

このような人類史を決定づける要因がある場所にいたことが重要だとわかったことが、この本を読んだことの最大の収穫ではない。これまで、少なくとも私の中には、「ヨーロッパ人が、アフリカやアメリカを侵略できたのは、文明や技術が発達していたからだ」ということと理解していた。しかし、「なぜヨーロッパの方が文明や技術が発達したのか?」、「なぜ、その文明や技術の発達が、アフリカやアメリカの住民の側でなかったのか?」という問いに転化することはなかった。つまり、この本を読んだ最大の収穫は、新しい問いを得たことだ。「なぜ、人類史を決定づけるような差異が、人間間に生まれたのか?」そして、「このような人類史に基づく差異に始まった現在の国際関係や国際援助をどう考えるべきなのか?」という新しい問いが読者にはおのずと生まれてくるだろう。

この『銃・病原菌・鉄（上・下）』には、文字を独自に作り出した民族の少なさが取り上げられている。その文字を作り出した民族の一つである中国と日本との間には、今、難しい問題を抱えている。日本は、戦中、中国へ満州開拓団として移民団を送り込んだ。満州分村移民第1号の村の名は、長野県の大日向村（おおひなたむら）である。この大日向村を中心とする満州移民政策は、『満州移民 近代民衆の記録6』山田昭次編に詳しく述べられている（また、OPACのキーワード検索で「満州」と検索すれば他にも満州の関連書物が多数見つかります）。大日向村は、村自体の名前とは裏腹に、日照条件が悪い土地であった。また、世界恐慌による経済情勢の不安定化の影響を受け、主要輸出品である生糸を作り出す養蚕業に頼る農村経済は大打撃を受けていた。そして、炭焼きによる収入を求めて、山の木々も過伐されていった。このままでは村人を養うことが難しい村であった。この危機を打開する手だてとして、国策による

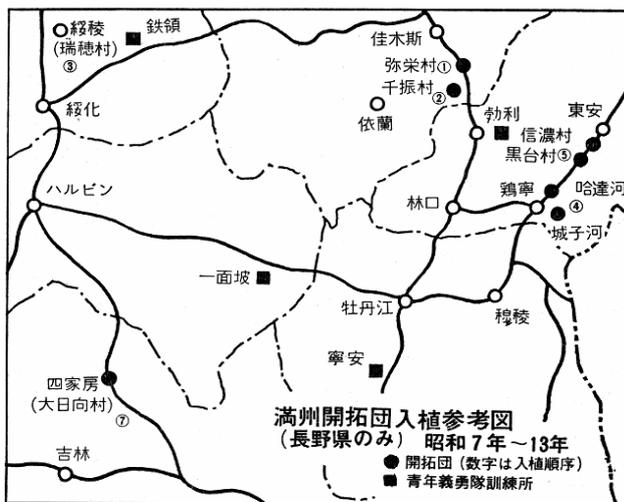


図1 満州開拓団の入植地の概要
 (『昭和戦争文学全集1 戦火満州に挙がる』より、抜粋)

農村経済更生という名で行われた移住による満州四家房（図1）での暮らしは、土地も肥えており、移民政策の成功例として日本では国策映画も作成された。昭和戦争文学全集の1巻『戦火満州に挙がる』昭和戦争文学全集編集委員会編には、人の盾として満州に送り込まれていることを知るよしもなく、日本が意気揚々と満州国へ移民する様子が描かれている。

しかし、その生活は長くは続かなかった。日本の敗戦によって、日本へ帰国するが、持っていた土地や家を売り、村を出て行った住民達には、もはや故郷の母村への帰村すらかなわぬことであった。今では観光地として名高い軽井沢の荒れ果てた土地へ、再び、開拓民として定住した。彼らは、帰国するまでは、中国の民が開墾した土地を利用していたことに思いをはせることはほとんどなかった。新たな荒れ果てた開拓地を開墾する立場におかれ、はじめて自分達が彼らの土地と労働力の搾取の上に成り立っていた侵略であったことに気がついたのであった。『昭和戦争文学全集』は、国威発揚の時代に書かれた作品から終戦後の作品を順に1巻から15巻にまとめているが、終戦後の内容をまとめた昭和戦争文学全集の最後の15巻『死者の声』では、戦争が終わってからこそその心の苦しみの手紙や手記で終わっている。この歴史の上に我々は今ここに暮らしているのである。ま

た、今なお中国残留孤児ではないかと思われる方が報道されることがある。侵略した占領国の日本人の子供達を、中国の民が引き取り育ててくれたことを忘れるわけにはいかない。大日向村の開拓団も、終戦後に中国からは帰国までの時間はかかったものの多くの人が帰国を果たせたのである。この執筆中にも小泉総理大臣が靖国神社を参拝したが、日本と中国との間に横たわる難しい問題の解決へ、我々日本人がすべきことがまだあることを大日向村をはじめとする満州移民の悲しい歴史は教えてくれているのではないだろうか。

「子曰、不患人之不己知、患己不知人也」この古代中国の古典『論語』の中の一節のような気持ちをお互いが持ち、東アジア諸国との相互理解が深まることを願いつつ、稚拙な蔵館案内を終わりにしたい。

『日本植生誌』宮脇 昭著
『銃・病原菌・鉄（上・下）一万三〇〇〇年にわたる人類史の謎』ジャレド・ダイヤモンド著
『戦火満州に挙がる』昭和戦争文学全集編集委員会編
『満州移民 近代民衆の記録6』山田昭次編（但し、教員研究室所有図書）

（かとう しょうご：応用生物科学部助手）